様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２７２５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２４６７

研究課題名（和文）野村芳兵衛の新教育思想と生活教育を基盤にした学校カリキュラム構成の実証的研究

研究課題名（英文）Yoshibei Nomura's New Educational Thought and an Empirical Study on Life Education-Based School Curriculum Construction

研究代表者
冨澤　美千子（TOMIZAWA, MICHIKO）

横浜美術大学・美術学部・教授

研究者番号：９０８１０６８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、大正自由教育を代表する池袋児童の村小学校（1924-1936）で訓導・主事を務め、戦後新教育期に岐阜市立長良小学校の校長であった野村芳兵衛（1896-1986）の新教育思想に基づく学校カリキュラム構想を明らかにするとともに、岐阜市立長良小学校の新校舎における新しいコミュニティスクールとしての学校づくりに、どのように継承されているのかを、実証的に研究・分析し国内外の学校と比較検討し、日本型教育の特徴を捉えこれからの日本の教育課程に新たな展望と方策を提案する研究であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本型教育の特徴としての「生活教育」は、今でも日本の学校教育の基盤として息づいていることを確認し、その良さを生かしながらカリキュラムを再編していくにはどうしたらよいのか、このたびの研究で考察できた。特にその特徴的な教育課程における時間として、「総合的な学習の時間」は考えられる。しかし現代のその時間は、有効に使われているとは考えにくい。これは子どもたちに移譲する時間でなければ、子どもたちの主体的な時間にはならず、教師の間で型を継承するのではなく、思想を継承することが必要である。

研究成果の概要（英文）：This research is based on the work of Yoshihei Nomura (1896-1986), who served as an teacher at the Ikebukurojidounomura Elementary School (1924-1936), which represents Taisho free education, and was the principal of Gifu City's Nagara Elementary School during the postwar period of new education. In addition to clarifying the school curriculum concept based on new educational ideas, fieldwork will be used to empirically research and analyze how it will be passed on to the creation of a new community school in the new school building of Gifu City Nagara Elementary School. , compared with domestic and overseas schools, grasped the characteristics of Japanese-style education, and proposed new prospects and policies for the future Japanese curriculum.

研究分野：教育学、教育思想史、カリキュラム研究

キーワード：野村芳兵衛　生活教育　日本型教育　カリキュラム開発　岐阜市立長良小学校　大正新教育　仲間作りの教育　初等教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

小学校における教育改革は、2000 年代に入り、新しい教育基本法のもとで進められてきた。しかし現在においても小学校現場は、学力的にも人間教育の面においても、厳しい状況が続いている。このような状況から言えることは、トップダウンに新しい教育政策を押し付けることでは、全く成果が上がらないということを実証してきた 30 年間であった、ということではないだろうか。欧米の新しい教育と言われるものを取り入れて翻訳し、教育改革を行うことでは、成果が上がらないのであれば、やはり伝統的に教育現場が培ってきた日本の教育の良さを見直し、継承・発展させていくことが良いと考えられるが、そのような安易に右から左に方向転換すればよいわけではないことも、日本の教育政策は歴史的に学んできたことであろう。それではどのような継承とどのような発展が考えられるのであろうか。

本研究は、研究代表者がこれまで研究してきた、大正自由教育を代表する池袋・児童の村小学校（1924-1936）で訓導・主事を務めて戦後の新教育期に岐阜市立長良小学校の校長であった野村芳兵衛（1896-1986）の新教育思想に基づく学校カリキュラム構想を、明らかにするとともに、その思想が継承・発展してきていると考えられる岐阜市立長良小学校の大きな転換期となる新校舎建設にともなうコミュニティスクールとしての学校づくりに、どのような形で継承されていくのかを、フィールドワークにより、実証的に研究・分析し、国内外の学校と比較検討して日本型教育の特徴について考察することを目的とした。

野村のカリキュラム構想を継承した教育方法として、長良小学校の「ひらがな活動」はあり、それが現在においても長良教育の大きな特徴として機能していることを、これまで明らかにしてきた。この大きな転換期に、そのような活動がどのような形で取り入れられていくのであろうか。また、日本国内では、長良と同様に地域が生活教育として育んできた教育活動は継承・発展しているのであろうか。本研究は、日本ならではと言える、日本型教育の持つ伝統的な良さを明らかにして、それを日本の未来の教育に、より良く継承していく方法を検討するものとして研究に取り組んだのである。

２．研究の目的

本研究は、大正自由教育を代表する池袋児童の村小学校（1924-1936）で訓導・主事を務め、戦後新教育期に岐阜市立長良小学校の校長であった野村芳兵衛（1896-1986）の新教育思想に基づく学校カリキュラム構想を明らかにするとともに、その思想が継承・発展してきていると考えられる岐阜市立長良小学校における、新校舎に変わってからのコミュニティスクールとしての学校づくりに、どのように継承・発展されていくのかを、フィールドワークにより実証的に研究・分析し、国内外の学校と比較検討し、日本型教育の特徴について明らかにすることを目的とした。さらに、これからの日本の教育課程に新たな展望と方策を提案することを目的とする研究であった。

３．研究の方法

本研究では、①「仲間づくりの教育」を核心とした野村芳兵衛の新教育思想は、歴史的にどのような学校教育とカリキュラムの構想をもたらすものであったのか？② 岐阜市立長良小学校において継承・発展させられている、生活教育を基盤にした学校カリキュラムは、

実証的研究を通して得られたデータに基づけば、実践のレベルでどのように開発・具現化されているものであるのか？　③　こうした思想史的研究と実証的研究を統合することによって、仲間づくりの生活を 基盤にした学校カリキュラム構成をどのようにモデル化し、日本型教育に関するどのような新たな展望と方策を導き出すことができるのか？という、３つの問いに対して文献研究及び実証研究をすることで研究を進めてきた。具体的には以下のような研究方法に至った。

（１）「仲間づくりの教育」を核心とした野村芳兵衛の新教育思想におけるカリキュラムの構想に関する文献研究

野村の教育思想におけるカリキュラム構想については、これまでに引き続き、文献を読み進めることで研究を深めた。日本の野村研究において、戦前の児童の村小学校におけるカリキュラム構想がこれまでの研究の中心であったが、本研究代表者は、野村が戦後に思想を具現して行くところに軸足を置いて研究してきた。野村は戦後、公立小学校で勤務することを通して、学習指導要領が試案の時代の地域教育計画として「長良プラン」を推進しており、そこにおけるカリキュラム構想は、学習指導要領における教科の捉え方や学習方法への提案等、現在にも通ずる、カリキュラムを考える上で基盤になる思想を具現する構想であった。それは戦前から野村が主張する「読書科」と「生活科」に大別し学習方法を継承する考え方であり、「本を作る教育」を子どもたちに保証するものであった。生活教育を基礎にしたカリキュラムであり、このような、子どもたちに教育課程のなかで移譲する時間を保証する考え方は、欧米のカリキュラムでは考えられないであろう。

（２）野村芳兵衛の思想に基づく学校教育におけるカリキュラムの方法論的研究

岐阜市立長良小学校の教職員の会であるみどり会の冊子や史資料を調査するとともに、教育実践の記述を文献的に丁寧に読み解くことで方法論をまとめた。具体的には、日本の特徴的な考え方の具現である「総合的な学習の時間」の新設をめぐる教育状況について考察し、現在の総合的な学習の時間の問題点を検討した。

学習指導要領試案の時代の、民主主義的教育を実現するための象徴的な教科として設置された「自由研究」の３つの目的に注目し、そのうちの２つは 1951 年改訂で特別活動へ回収されていく方向性であったが、「子どもたちの自由な研究を推進させる時間」であるという項目は、「それぞれの教科の中で追求できるようになった」とし扱われなくなる。これこそが子どもたちの自主的・自発的な活動の時間であり、50 年後の教科外学習に新設された「総合的な学習の時間」設置で初めて授業時間が確保されるようになったと考えられる。授業として扱いにくいことは既に承知の上で形を変えて設置した、日本の教育の特徴であり、象徴的な授業であると考える。その教育方法と課題について考察・検討を重ねた。

（３）方法論に基づく実証的研究

岐阜市立長良小学校における新校舎に変わってからのコミュニティスクールとしての学校づくりに、これまで継承されてきた教育活動が、どのように継承・発展されていくのかを、フィールドワークの記録により検討する予定であった。（特に新築直後である 2020 年 3 月から 2020 年度前半に集中的にフィールドワークする予定であった。）しかし、コロナウィル

ス感染症予防のため、2020 年 3 月から 2 年間以上、小学校へ調査のために立ち入ることはできなくなってしまった。ようやく訪問できたのが、2022 年 5 月になってからであった。そのためこれについては、引き続き研究を継続していく予定である。

その間、子どもたちに移譲する時間を継続的に歴史的に持ち続けた国内の学校２校でフィールドワークすることができ、それぞれの記録を取ることができた。しかし、これらも 2021 年度の終わりからやっと関わることができたもので、実証的研究はまだ途上である。

４．研究成果

日本型教育の特徴としての「生活教育」が、今でも日本の学校教育の基盤として息づいていることを確認し、その良さを再認識し生かしながらカリキュラムを再編していくにはどうしたらよいのか、考察した。コロナ感染症の影響で、フィールドワークによる調査は最終年度のみになったが、一定の成果が得られたと考えている。それについては以下の３点にまとめられる。

（１）「仲間づくりの教育」を核心とした野村芳兵衛の新教育思想におけるカリキュラム構想の文献研究に関する成果

池袋・児童の村小学校において野村は、新教育思想に基づきながら、子ども相互の交友である「親交学校」を学校生活の基盤とし、その上に、野外の遊びを中心とした「野天学校」と、文化遺産の伝達を中心にした「学習学校」を、両輪のように機能させる三位一体的学校教育構想を打ち出した。さらに、この構想をカリキュラムにおいて明確に具現できるよう、考察・検討された結果、大きく２つに大別される。すなわち、子どもたちの仲間作りの生活を基盤に、「大人文化の継承」を行う「読書科」（教科書を読む教育）と名づけられた領域と、「子ども文化の創造」を行う「生活科」（教科書を作る教育）と名づけられた領域を、学校教育の二つの基軸として立てるものである。野村のこのような学校カリキュラム構想は、戦後新教育期には長良小学校における「長良プラン」の編成を経て、現在まで持続的な一貫性を持って発展的に具現化されていることを、野村の諸所の論文および長良小学校の教職員の会であるみどり会が定期的に出版した『みどり会誌』で確認した。そこでは、「子ども文化の創造」をめざす「親交学校」を土台とした「野天学校」の軸が、「自主」「連帯」「創造」「健康」を資質・能力の育成目標とする「ひらがな活動」という独自に名づけられた領域において実践されている。各育成目標に対応した特別活動である、「いぶき」（朝の会・帰りの会）、「くらし」（学級活動）、「みずのわ」（児童会活動）、「いずみ」（クラブ活動）と、総合的な学習の時間である「こどう」が、相互に関連づけた有機的全体としてのカリキュラムを編成していることが明確に確認できる。その際、型の継承ではなく、「子どもはそれを行いたいのか」「子どもたちにとって、どのような意味づけができる実践なのか」など、目の前の子どもたちを見つめた上で、教師が自問することや再計画することの意義が重んじられている。このことが、意味の形骸化へ進まない、思想の継承になっていることが明らかになった。

（２）岐阜市立長良小学校だけでなく日本の小学校に脈々と継承された生活教育思想と実践の検証による成果

小学校の方針もあり、なかなか長良小学校でのフィールドワークをすることができなかったが、その間に研究活動・交流のなかで、２つの小学校のフィールドワークをすることができた。

①上越市立大町小学校の実践

2022 年 5 月から上越市立大町小学校の実践をフィールドワークする機会を得た。岐阜市立長良小学校は、外部からの参観を引き受けていなかったが、こちらの学校ではそれが許可されたのである。

日本の尋常小学校において、戦前の郷土教育思想が拡がり後退する歴史のなかで、郷土教育の重要性を唱え維持し続けた新潟県高田師範学校の思想を継承した上越市立の小学校は、戦後の地域教育計画の時代も、完全なコアカリキュラムではない独自の思想を貫き、その後も継承してきた歴史がある。現代における実践として、上越市立大町小学校の「学年の活動」実践の実証的研究を行うことができた。「学年の活動」は、子どもたちの生活に根ざした郷土教育を１年かけて実践している。「ひたる活動」のなかで子どもたちは、仲間作りの生活を協働的・自発的に築いていることが確認された。この研究により、長良小学校だけでなく独自に生活教育を貫いた地域が日本の中にあることを明確に確認することができた。

②私立成城学園初等学校の実践

2023 年 3 月から私立成城学園初等学校の参観と教師たちとの研究交流を行っている。この学校では、日本の新教育思想を牽引した大正期からの「伝統」を、どのように継承・発展させるのか、岐路に立っている。実験校として開校した同校は、教師たちが教育実験することが伝統であると同時に、新教育としての子どもたちの主体的活動を尊重することが伝統であるという、相反する矛盾した理想を持つ学校である。そもそもこの学校における「伝統」とは何か、を問うことが難しい。その上で、今の子どもたちにとって有効なカリキュラムを考えうるのか、まだ研究は始まったところである。今後の研究としては、継続的に教師たちと共に、より具体的なカリキュラム開発に向うことであると考えている。

（３）日本の学校教育全体が子どもたちの成長に寄り添えるためのカリキュラムの再検討と、そこにおける総合的な学習の時間の意義と現在的問題点の考察

野村芳兵衛のカリキュラム構想によると、生活教育としての学校カリキュラムは、「読書科」と「生活科」に大別され、どちらも教育課程において重要であり、そのバランスの良さが欠かせないことが解った。現在のカリキュラムで考えると、長良小学校で行っている「ひらがな活動」と言われる活動は、特別活動と総合的な学習の時間であり、どれだけ子どもたちにその活動を移譲できるのかということが重要である。ところが一般的に多くの学校において、総合的な学習の時間は、教師のカリキュラム開発に時間であり、教師の考えたカリキュラムを行う時間になっているのが現状であろう。移譲するということと放任するということは違い、より良い活動になることを支援しつつ、子どもたちが主体的に学べるように舵を渡すことは非常に難しい。問題点については、明らかになったものの、方法論については安易に型を作ることはできるものではなく、思想の継承をどのように行うのかということであろう。今後の継続的研究が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 冨澤　美千子	４．巻 12
２．論文標題 「日本の小学校における教科外教育の役割についての再考察－カリキュラム編成の歴史的・思想的変遷を参考にして－」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『横浜美術大学 教育・研究紀要』	６．最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 冨澤美千子	４．巻 4
２．論文標題 「日本の小学校における教科外教育の役割についての再考察 －カリキュラム編成の歴史的・思想的変遷を参考にして－」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『横浜美術大学　教職課程年報』	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 冨澤　美千子	４．巻 11
２．論文標題 「小学校教育課程における特別活動の位置と児童会活動の意義―岐阜市立長良小学校の『みずのわ』活動を通して－」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『横浜美術大学 教育・研究紀要』	６．最初と最後の頁 65-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Michiko TOMIZAWA	４．巻 4
２．論文標題 “How Integrated Study Became Expansive Learning in Japanese Elementary Schools: The Three Dimensions of Expansion”	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Actio 4/ The Japanese Association for Research on Activity Theory	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 冨澤美千子
2．発表標題 野村芳兵衛の教育思想―その可能性と現実性―
3．学会等名 活動理論学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 冨澤美千子	4．発行年 2021年
2．出版社 大学教育出版	5．総ページ数 138
3．書名 子どもたちの創造力を育む総合的な学習の時間	

1．著者名 冨澤美千子	4．発行年 2021年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 263
3．書名 野村芳兵衛の教育思想ー往相・還相としての「生命信順」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ナガセ　アユミ (Nagase Ayumi)	カリフォルニア州立大学ソノマ校教育学部幼児教育学科	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
2022WEF国際教育フォーラム　国際シンポジウム（共同開催）「日本型教育における新教育の継承と発展」	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	カリフォルニア州立大学ソノマ校教育学部幼児教育学科			